

趣味の広場

想いを墨に託して

二十回生 米崎(三輪) ふゆ子

(冬香)

私と水墨画の出会い、今から二十六年前「水墨画による年賀状の描き方」という講習会を受けたのが始まりでした。この時、講師で日本水墨画協会運営委員の先生から、調墨など基本的な技法を教わったのをきっかけに日本独自の伝統芸術である水墨画(実際は鎌倉・室町時代に中国から伝わり禅宗の僧侶や貴族の間で、より格調高い芸術として広まったと言われております)を勉強したいと思いい立ちました。写生が大切なことは、他の絵画と同様ですが題材となる梅・椿・水仙・桜などのスケッチでは、人知の及ばない造化の妙をいつも自然から教えられます。

自分もこれからは上野へ出せる様な画をかきたいと思う様になりました。

最初は50号、100号位から始めましたが屏風に移りまして2000年の頃から四曲屏風を描いております。技術的にもまだまだ未熟な作品ですが、これ迄千里山会誌に載せていただきまして、とても有難く感謝しております。そして千里山会で一方ならぬお世話になっております皆様方に折にふれ上野展をご高覧戴いておりますことを心より有難く厚く御礼申し上げます、本当にありがとうございます。

この日本水墨画協会を創立されました
岩上青陵先生は1991年お作品「夜の梅」
が大英博物館に収蔵されたお方です。
この翌年の都美術館講堂での授賞式には
大英博物館美術部長のローレンス・
スミス先生が講演されました。

よく「墨に五彩あり」と言われますが、実際にはもっと多くの段階があつて、水墨画はこの墨と水との濃淡のハーモニーで表現出来る唯一の心の画だと思っております。又、線とぼかしでほぼ画が決まってしまう所に緊張感とスリルがあります。同じお手本でも出来上がった画は皆それぞれ違つていて「手本はあくまでたたき台」と言われる意味が納得出来ます。稽古では山水、花鳥の手本を勉強しますが上野などの大きな展覧会では、各自オリジナルな作品を発表します。私は主に生命力あふれる熱帯の植物群や世界遺産の風景などを描いております。

テーマが決まると資料集めにかかります。資料は現地で撮った写真やスケッチ、画集、新聞や雑誌の切り抜きです。それらをベースに構図を考えてからこれまでに習得した描法を使って描いていきますがうまくいった時の達成感は何とも言えません。

上野都美術館での日本水墨画展は、今年で創立四十六回展になりますが私は習い始めた頃に丁度二十回展を見まして墨の芸術のすごさに感動し、

今年の4月18日から23日まで上野都美術館で開かれた第46回日本水墨画展で米崎さんは「全日本美術新聞社賞」を受賞されました。今回はおめでたい受賞を機に水墨画との出会いからこれまでのご苦労話を寄稿頂く様お願いしました。

千里山会員一同でお祝いしたいと存じます
編集部 奥田記